

視点 論点

よつ葉的自給圏を

平澤充人 (ひらさわ農園)

最近、私は「日本に、いつか食糧危機が来る」と思うようになった。食べるものがない、なんて事態は来てほしくはない。来てはならないと思いつつ、そう思ってしまう理由を挙げてみる。

●食糧危機を招く要因

1. 気象変動

今や異常気象は当たり前になった。大雪、晩霜、雹、長雨、干ばつ、台風と災害が頻発する。元凶である環境汚染を何とかしなければと、以前から国際的な会議が持たれてはいるが、有効な対策はいっこうに具体化しない。そうやって時間を浪費している間にも環境汚染、気象変動は年ごとに進んでいく。結実不足、病気の多発、品質劣化、収量低下など農作物の生産が不安定になった。

2. 農村の労働不足

農業を担ってきた先輩たちが次々に故人になって、働き手が櫛の歯が抜けるように少なくなっている。今の日本農業の、担い手の多くは70歳以上である。あと10年したら、あらかたの働き手は農作業からは手を引いていよう。交代する若手は少ない。最近では農業に就く若者が増えて、いい傾向だとは思いますが、安定生産のための絶対数には到底足りない。

3. 田畑の荒廃

ススキや灌木が繁って荒れた田畑が目につく。私の地方ではこういう農地は20年前の3割くらいに達する。働き手の減

少と相まって、こういう農地が元の田畑に戻ることはもうなさそうだ。

4. 農家のコメ離れ

食料としては主食のコメがいちばん大切なものと言える。モンスーン気候に適し、水田という装置で、2千年も3千年も連作障害なしで作り続け、貯蔵が効き、単位重量当たりの養育人口は穀類の中では最も大きい。こんな優れた食糧なのだが、日本のコメは世界一高いといわれる。でも、食卓での茶碗一杯30円足らずのコメが高いのだろうか。生産農家の10アール(20m×50m)所得が10万円以下では再生産は難しい。「コメは買った方が安い」と、コメづくりをやめてしまう農家が増えて生産者が消費者に代わっていく。

自分の国の田畑は荒らし、食いものは他の国から買う。食料自給率40%の我が国の政治は、先進国のたたずまいとして適切ではない。どこかで輸入途絶、食糧危機というバチが当たるのでは…。

●「よつ葉的自給圏」で自衛、自給を確保しよう

こんな政治に頼っては危ない。わたしたちは集団的自衛権、じゃなかった「よつ葉的自給圏」とでも呼ぶべき関係を改めて再認識して、自衛、自給を確保していくのが適切な自己防衛だ。

幸いにして「よつ葉」が永年活動してきた優れた成果だ。日本全国の食糧自給をどうするか、なんてデカイことは考えなくていい。自分たちの守備範囲を固く

ひらさわ みつと 1942年生まれ。原野を開拓した父を継いで、りんご、梨、桃などを栽培する二代目。現在は三代目の息子に移りつつある。長野県南部の伊那谷といわれる地域の写真を撮るのが趣味。よつ葉へのりんご、桃には日ごろの農作業や思いを「アルプス便り」として添付している。家族は妻、息子夫婦、孫の7人。



守って食糧危機に対応するのがいい。

消費者の皆さま、安くて旨くて安全という、三拍子そろった農産物ではできません。安さだけを追求すれば農家は疲弊してしまいます。これまで通り農産物を買っていただきたい。流通を担う、よつ葉の職員の皆さま、肉体労働と精神労働を兼ねる流通の仕事は大変だけれど、がんばってほしい。

こちら農家としても気象変動に耐え、土を大事にして持続性を図り、経営規模を追わず手をかける。安さでは外国ものにはかなわないのだから、会員の期待と信用にこたえられる品質のものを追求するしかない。

三者一体になった「よつ葉的自給圏」であっても100%の自給は難しいと思うが、それぞれの立場でデメリットを負担して、危機に備える必要がある。

食糧危機なんて実は来ないほうがいい。来ては困る。でも、いつかは来る、と思うのはトシヨリの心配性かな。できれば、こんな思いは誇大妄想であれ。杞憂であれ。



赤石果樹出荷組合の仲間と。左端が平澤さん。

よつ葉憲章

- 1 私たちは食は自然の恵み・人も自然の一部という価値観に重きを置き、自然との関わりを大切にする、安心して暮らせる社会を求め、その実現にむけて行動します。
- 2 私たちはモノよりも人にこだわります。バラバラにされた生産・流通・消費のつながりを取りもどし、そして人と人のつながりを作り直します。
- 3 私たちは食生活の見直しを通じて、世界の人々の生活を考え、共に生きる道を目指します。
- 4 私たちは目先のとりあえずの解決より、根本的な未来に向けた暮らしの創造をめざします。
- 5 私たちは志を同じくする団体や個人との協同を、小異を超えて追求します。